

English Garden 第90話

"Haru proved to be a wonderful mother, deeply loved by all three children."

Edwin O. Reischauer

「ハルはよい母になり、3人の子どもたちみんなに深く愛された」 ライシャワー

元駐日アメリカ大使エドウィン・O・ライシャワーの5回目で、今回は二人目の妻として迎えられた松方ハル氏の紹介です。

ハルの父方の祖父松方正義公爵は、明治維新に大きな役割を果たした人物で、明治政府の蔵相として日本の財政制度を確立し、1890年代には2度にわたって首相を勤めました。

母方の祖父新井領一郎は維新後間もなく20歳で渡米し、アメリカの市場で生糸の直接取引をするため商社を設立、日本から妻を迎えてニューヨークの郊外に住みました。商用で帰国する以外はほとんどアメリカで過ごし、日本生糸の最初の大貿易商となりました。

ハルの母美代はアメリカで生まれ育ちましたが、当時エール大学に留学していた松方正義の九男正熊男爵との結婚の話がまとまり、日本に帰りました。格式のある家柄で、しかも大家族の中での生活は美代にとって苦勞が多かったようですが、一番心配だったのは子どもたちの教育でした。美代はキリスト教の深い信仰を持っていたためアメリカ精神による教育を重んじ、強い意志を持つ独り立ちできる人間に育てようとしたのです。そのためハルを東京のアメリカン・スクールに入れました。そこでハルは、前回にも書きましたように、小学6年生のとき、最上級生でスポーツ万能だったエドウィンをよく知っていたのでした。また、ハイスクールでは、教師になって戻ってきたエドウィンの兄ロバートから歴史を習いました。才気煥発の青年教師として、とても人気があったということです。



ハルはアメリカン・スクールを卒業すると、イリノイ州のクリスチャン・サイエンス系のプリンシピア大学に留学し、1837年(昭和12年)に帰国しました。日本は戦時色を強めていて、一家は親米派として常に監視され、ハルは外国人の友人に会うこともままらなくなりました。

次第に孤立する中で、ハルは日本の勉強を始めました。もっとも興味があったのは美術史で、博物館や美術館に通って平安朝から室町時代にかけての絵巻物を読みあさり、古本屋をまわって「伴大納言絵詞」「北野天神絵巻」「歌舞伎草紙絵巻」などを複写したものを集めました。しかし、日本語を読む力が足りないので大学出の人の協力を求めて読解し、それを英訳して解説を加え、母校のプリンシピア大学の図書館に贈りました。

また、日本史を世界史的な視点からとらえるため、H・G・ウエルズの世界史を読みました。日本史では特に明治維新史に興味があり、伊藤博文の伝記を読んだり、徳富蘇峰が書いた『侯爵松方正義伝』を英訳したりしました。こうして4年間、日本文化の勉強に没頭しました。1941年に太平洋戦争が始まると、生きるのに精いっぱい、落ち着いて研究などできなくなったのです。

1945年9月、終戦から1ヵ月ほど経ったころ、国際ニュースを扱う一流新聞「クリスチャン・サイエンス・モニター」の特派員ゴードン・ウオーカーの通訳と取材活動の助手を勤めることになり、日本の各新聞社の人や関係にも会う機会ができました。アメリカから帰国後、日本の歴史を勉強したことが、このときたいへん役に立ったということです。

1952年には、古い歴史を持つ週刊紙「サタデー・イブニング・ポスト」の特派員のオフィス・マネジャーを引き受け、自分でも署名入りの記事を発表するようになりました。1955年には、日本人としても女性としても初めて、外人記者クラブの理事に推薦されました。

ハルは以前から、東洋と西洋の文明の架け橋になる使命を担っていると思っていましたが、日本の友人とアメリカの友人とは言葉が壁になって溶け合わず、自分はまるで日本とアメリカという二つの巣のあいだに宙づりになっているクモのようだと感じていました。

結婚に関しても、あまり日本的な考えにこだわる男性では合わないから留学の経験のある人が望ましい、また日本のことを知ろうとしないアメリカ人も困る、などと考えているうちに30代も終わりに近くなっていました。

そのとき、ハルの言葉を借りると「その二つのクモの巣を無理なく重ねられるような」エドウィンが現れたのです。ハルにとってライシャワーの名前はなつかしく、人種の違いは問題ではありませんでした。

エドウィンは、「アドリエンとの結婚生活が幸せだったから再婚するつもりだった」と言っており、アドリエンも病床については自分から再婚を勧めていたということです。

こうして1956年1月に2人は結ばれ、「日本とアメリカと二つに分断されていた」ハルの内面が、初めて一つになりました。

ハルは突然、難しい年令である10代の3人の子どもの母となりました。しかし、最初のうちこそ些細な気持ちの行き違いなどはあったものの、すべて子どもたちと相談して行動するように心がけてみんなの信頼をかちとり、心から愛されるようになりました。子どもたちは、本当のお母さんになってほしいと、ハルのことを人に話すときも "step mother" (継母) という言葉は使わず、"my mother" (私のお母さん) と呼んだそうです。

なお、ここではご紹介する余裕がありませんが、ハルが一生をかけた著作『絹と武士』("Samurai and Silk")は、歴史上の大人物となった父方と母方との二人の祖父を通して描かれた家族史であると共に、日本の近代史でもある壮大な物語です。

(次回に続く)

参考文献:

"My Life Between Japan and America" Edwin O. Reischauer, Harper & Row, Publishers, New York, 1986

『ライシャワー自伝』エドウィン・O・ライシャワー著、徳岡孝夫訳、文芸春秋、1987年

『私の歩んだ道』ハル・ライシャワー著、主婦の友社、1966年(インタビュー記録)

『絹と武士』ハル・松方・ライシャワー著、広中和歌子訳、文芸春秋、1987年